

山梨における文庫活動（伊東）

## 山梨における文庫活動

—青沼文庫 楠祐子の活動—

伊 東 久 実

### はじめに

文庫とは、元来「ふみくら」、書物のくらという意味で使われたことばであるが、現在は図書館、あるいは出版の一形態など多様な意味に用いられている。本稿でいう文庫とは、「地域において、親、とくに母親を中心に、住民によって開かれた子ども向けの私設図書館」（『図書館用語大辞典』）のことを指す。

私設図書館としての文庫は、運営の主体によって家庭文庫（個人が家庭の一室を開放し行うもの）と、地域文庫（自治会や青年会、PTAなどのグループが協力しあい、町内会や自治体の援助を受けて地域の公共施設などで行うもの）という呼び方で区別されていたが、現在ではそれぞれの文庫の運営形態が発展し多様化した結果、明確に区別し難い面も生じている。このことから、総称として「文庫」または「子ども文庫」と呼ばれることが多い。後述する山梨県立図書館が推進した「一坪図書館」も、個人に運営が任されている子どもの読書施設という理由から「文庫」として捉えることにする。

わが国における初期の主要な文庫は、1951年から1958年にかけて設立された。「道雄文庫ライブラリー（村岡花子）」「クローバー子供図書館（金森和子）」「土屋児童文庫（土屋滋子）」「かつら文庫（石井桃子）」など児童文学者が運営する家庭文庫の形式が多く見られた。1957年にはこれら4つの文庫を中心とする「家庭文庫研究会」が設立され、それまで個々に手

### 山梨における文庫活動（伊東）

探りで活動していた家庭文庫の連携と、子どもの読書についての共同研究が推奨された。<sup>(1)</sup>この時期は、児童図書サービスの向上を目指した「児童図書研究会」の設立や、「母と子の20分間運動」の開始など、子どもの読書環境の充実を図ろうとする運動が開始された時期でもある。

その後、児童文学者石井桃子は、自宅を開放して始めた「かつら文庫」の7年間の実践記録を元に『子どもの図書館』を刊行した。この本は「文庫・図書館、子どもの読書というものへの目を開かせ、関心をもち上げた功績は大きい」<sup>(2)</sup>と評価されるように、その後の文庫活動の盛り上がりにも多大な影響を与えた。『子どもの図書館』が刊行された1960年代は、日本が高度成長期を迎え、子どもを取り巻くテレビやマンガの低俗化と、日常のあそび空間の減少が問題となった。子どもたちに良い本を与え、読書の楽しみを伝えようとする人が増加する中でこの本の刊行は、子ども文庫数の増加の大きな要因となった。

文庫の全国的な連絡組織も次々に発足され、文庫活動は1970年代の高揚期を迎えた。急速に発展した文庫の活動内容は多様であった。「子どもたちの読書環境を維持充実するために又、心身両面の健全な発達をはかること」を目的に、本の貸し出し、読み聞かせ、人形劇、紙芝居、手作り遊び、ハイキング、合宿、遺跡発掘なども行われた。<sup>(3)</sup>1970年代にかけての文庫の発展は、文庫連絡会を中心に自治体に働きかけていく「図書館づくり運動」をも創出した。

子ども文庫数は、1980年代初頭にピークを迎え、その数は全国で4400以上に達した。<sup>(4)</sup>その後、少子化、子どもの生活の多忙化、活字離れなどから、減少傾向にありながらも、2004年の時点で、3000以上にのぼるとされる。<sup>(5)</sup>

このような全国的な文庫活動の潮流の中で、山梨県の文庫活動は1958年に最初の文庫が産声をあげて以来徐々に広まり、<sup>(6)</sup>文庫数は1970年代以降

## 山梨における文庫活動（伊東）

急増した。1980年の調査では山梨県内の文庫の総数は446にのぼった。この数は全国平均の86を大幅に上回る突出した数字である<sup>(7)</sup>。この全国的にも類を見ない山梨の文庫活動の興隆には、重要な役割を果たした二人の女性の存在がある。二人は時には協力し合い、時には異なる手法で文庫活動を展開していった。

本稿では1章において山梨の文庫活動の流れと特徴を概観する。2章では、その礎を築いた二人の女性の一人楠祐子に焦点を当てる。文庫数の推移が全国一激しい山梨の地で、一家庭人がなぜ文庫を開くに至ったか、どんな出会いがあり、何に迷い、何を喜びとし推進していったかなど、文庫活動の取り組みを明らかにする。調査にあたっては甲府文庫連絡会の記念誌を中心とする資料研究の他、本人への聞き取りを行った。なお、本稿では一坪図書館については概説の程度にとどめる。

### 1 山梨県の文庫活動の特徴

#### 1. 1 全国調査にみる山梨の文庫数の推移の特徴

わが国の文庫数は、1951年の「道雄ライブラリー」を出発点として徐々に増えていき、1970年代から急増している。1980年代になると少子化、子どもの生活の多忙化、またファミコン、ゲーム機の普及による「活字離れ」から利用者数が減り、それに伴って文庫数の減少傾向がみられる<sup>(8)</sup>。この傾向は1990年以降も続くが、「どんどん減っていくという感じではなく、むしろユニークな文庫があちこちで始まっている<sup>(9)</sup>」という見方がされている。

『全国子ども文庫調査報告書』によると、「子ども文庫は民間の自主的な活動」であるため「どこでどのような活動があるかを把握するのは大変難しい<sup>(10)</sup>」とされているが、この調査から筆者が算出した山梨を除いた一県あたりの文庫数の平均と山梨の文庫数は以下のとおりである。

山梨における文庫活動（伊東）

表 1 全国平均と山梨県の文庫数

調査年	全国平均	山梨県
1958年	1.30	0
1970年	5.70	3
1974年	41.50	155
1980年	86.09	446
1993年	83.20	45

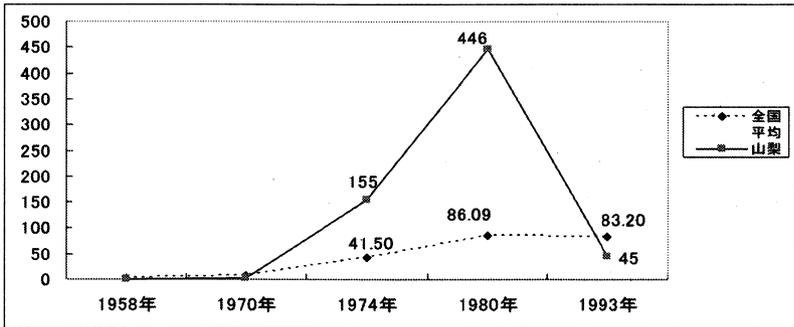


図 1 全国平均と山梨県の文庫数の推移

図 1 から言えることは1970年代に入り、文庫数が急増し、その後も増加は続き1980年にピークを迎えている。このことは全国も山梨県も共通している。ところが、1980年調査では全国の平均文庫数に比して山梨県は突出して多い。また1970年調査以降、山梨県の子ども文庫数は他の都道府県に例を見ない極めて急激な増減のカーブを描いている。

この急激なカーブは、山梨県立図書館が設置を推進した一坪図書館の増減が要因であるとされている<sup>(11)</sup>。しかし、山梨の文庫活動には同じ時代にもう一つの流れがあった。それは、行政側の働きかけで活動を始めた一坪図書館に対して、市民の自発的な活動として、有志が互いに交流し学び高めあっていった甲府文庫連絡会の存在である。（甲府にも一坪図書館はあ

## 山梨における文庫活動（伊東）

り、また甲府以外の地区にも自発的に発足し活動を行う文庫がある。）

### 1. 2 一坪図書館の推移

一坪図書館とは、公共図書館の設置状況が他県に比べて劣っていた山梨県において、図書館不足を補い、従来行ってきた移動図書館の活動をさらに県民に密着した図書館奉仕業務として提供するために、1973年から山梨県立図書館によって設置を推進されたミニ図書館である。家庭の玄関や物置、お寺の一部などを場所として図書の貸し出しが行われた。県下各地域に設置され（1976年には未設置市町村なし）、館長には市町村教育委員会を通してボランティアを募り、週一回の貸し出しを定めた以外は、運営は一坪図書館長に任される。あくまでもボランティア精神を優先し、地域の人のためにやろうという人の申し出によって始められた。県立図書館から、子どもと大人の本100冊をセットにして300冊までが届けられた。1978年からは各市町村に移管され、1985年には600館すべてが移管を完了している。

一坪図書館は1973年の50館<sup>(12)</sup>をスタートとし、1985年の624館<sup>(13)</sup>を頂点に、2005年の41館<sup>(14)</sup>へと急激に減少した。これは全国調査で明らかにされた山梨県の文庫数の推移と同型であり、行政の推進によって計画的に普及していった一坪図書館が長期間にわたって存続する率は低いといえる。

### 1. 3 甲府文庫連絡会に参加している文庫数の推移

甲府文庫連絡会は、地域の子どもたちに読書の楽しさを伝えようと、自発的に始められた13の甲府の子ども文庫が集まって1975年に発足した。この会は、県立図書館の一坪図書館運動をきっかけに、甲府市立図書館の呼びかけで地域の読書推進のための話し合いの場として始まった。発足当時は文庫の代表者や小・中学校の教師、読書グループの代表が集い「甲府市読書推進連絡協議会」と名乗っていたが、回を重ねるごとに文庫関係者の

### 山梨における文庫活動（伊東）

みの出席となり、1983年には「甲府文庫連絡会」と名称を変更した。この会の活動の基本方針は、各文庫がその地域の子どもに本の貸し出しをしたり、読み聞かせをして、子どもの読書環境を整えることである。

「協議会は、発足するやいなや、忽ち独り歩きを始めて、自主的な活動をすすめ、図書館や教育委員会に様々の要求を提出し、甲府市の文庫活動を発展させる大きな力になりました<sup>(15)</sup>」

とあるように、会ではお互いの文庫に実際に行き見学したり、県内外の先進図書館見学、絵本作家を招いての講演会や各種研修を重ねた。また、行政への陳情、請願の成果として、協議会への補助金が交付され、配本数は増加し、看板・書棚の貸与が受けられるようになった。<sup>(16)</sup>

「図書館側も、あくまで住民の意志を尊重し、上から枠をはめるようなことはしなかったのが、協議会の自主的な活動を助けた<sup>(17)</sup>」

とも記されている。文庫と図書館間の相補関係は、図書館行政の改善の一翼を担うことになった。文庫連に参加する文庫は現在8文庫になったものの、発足から30年たった今も互いの情報交換や学びあいを毎月重ねつつ、図書館ボランティアとして様々な図書館事業への協力、親子図書館見学、折り紙教室、講演会など継続した活動を行っている。

甲府文庫連絡会に参加する文庫数の推移は以下のとおりである。<sup>(18)</sup>図2から言えることは、カーブはなだらかで、ピークの24文庫の中の6文庫は現在も活動を続けており、<sup>(19)</sup>長期間に渡って活動を続ける文庫の割合が高い。

山梨における文庫活動（伊東）

表 2 甲府文庫連絡会に参加する文庫数

年	文庫数	年	文庫数	年	文庫数
1970	2	1982	24	1994	17
1971	3	1983	23	1995	16
1972	3	1984	23	1996	14
1973	7	1985	23	1997	9 新文庫 1
1974	10	1986	23	1998	9
1975	13	1987	19	1999	9 新文庫 1
1976	15	1988	18	2000	9
1977	17	1989	18	2001	9
1978	21	1990	17	2002	9
1979	24	1991	16	2003	8
1980	24	1992	16	2004	8
1981	24	1993	16	2005	8
				2006	8

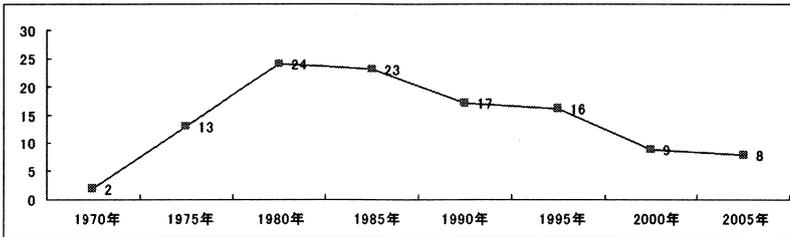


図 2 甲府文庫連に参加する文庫数の推移

2 青沼文庫における楠祐子の文庫活動

本章では山梨の文庫活動の草分け、かつ甲府文庫連の中心的存在であり、36年という長期間に渡り今なお現役を続けている青沼文庫（現在は共友文庫の世話人）の世話人、楠祐子の活動を明らかにする。一家庭人として人

や社会と関わりながら、「子どものしあわせ」を主体的に追求した楠の文庫実践をたどる。

## 2. 1 すべての子どもに

楠は、1970年に子育て仲間数人と協力して青沼文庫の活動を開始した。「青沼」とは、楠と友人が住む地名である。当時、子どもたちを取り巻く文化的環境は、大人が集まればテレビや雑誌の低俗さが話題になり、病院の待合室に置かれる本の多くはマンガ本という状況であった。

『岩波子どもの本』や、1956年から創刊された福音館の『こどものとも』を定期講読しながら、優れた絵本のすばらしさと、長女の絵本に驚喜する姿に大きな喜びを経験していた楠は、この乏しい読書環境を危惧し、優れた絵本を置く必要性を感じた。

またその頃、高校生になった長女がかつて楽しく読んだ100冊ほどの『こどものとも』がまだ読める状態で押入れにしまっていてあることに対し、「まだ読める、喜べる本をもっとみんなに知らせたい。多くの子のために役立てられたら……」と考え始めるようになっていた。

「子どもに読ませたい本がたくさんある。一人でも多くの子に絵も文も独創的で素晴らしい絵本に出会わせたい。」そう考え続けていた楠と、1冊の本の出会いが青沼文庫開設の直接のきっかけとなった。

それは、子育ての仲間と一緒に愛読していた『子どものしあわせ』（日本子どもを守る会）に掲載された記事であった。<sup>(20)</sup>そこには、家庭文庫の個々の活動報告が紹介されていた。それらは楠と共通する志をもった人々によって模索する様子が詳しく描かれていた。

こうして家庭文庫の活動の存在を知った楠は、「私にもできるかなあ……私にもできそうだ」という気持ちで仲間にもちかけ、文庫開設の準備は始まった。「頼りは『子どものしあわせ』の記事ひとつだった」。

## 山梨における文庫活動（伊東）

「にぎやかな子どもの出入りを家族があまり好まないのではないか」という心配から、開設場所は楠本人の自宅ではなく、200メートル程離れたグループの仲間の自宅に決まった。8畳ほどの部屋に家にある書棚を2つ持ち込み、そこに並べる本はグループのメンバーがそれぞれ自前を持ち寄った。

昭和45（1970）年6月7日いよいよ開設の日、文庫に集まったのはメンバーとその子ども、そして個々のメンバーが自分の近所で誘った親と子ども合わせて20人ほどであった。最初のうちは月に一回の貸出日を設定し、貸出日には貸し出しの他、メンバーは交代で読み聞かせを行った。しだいに口コミで利用者は増え、月一回の貸出日では利用者の要求に応えられないと感じた楠は、「覚悟を決め」た。開設場所となっているメンバーにこれまで以上の負担はかけられない。毎週1回の開設を可能にするには楠の自宅へ文庫を移転するしかない。

移転して毎週子どもたちが集まるようになった自宅の文庫では、たくさんの本の貸し出しや、読み聞かせが行われた。個人の読書カードは、字を覚えてたの子どもでもなるべく自分で記入できるよう、画用紙に大きな記入欄を工夫した。活動が盛んになる中で、家族にできる限り迷惑がかからないように、文庫の大きなイベントの際は近所の神社の一間を借りて親子読書や紙芝居の読み聞かせを行った。

喜んでやって来る子どもたちが増えるに連れ、楠の内にはある使命感が生まれ、しだいにそれは強くなっていった。それは「子どもの本、読書と名のつく集まりにはどこへでも行ってやろう。何でも勉強しよう。一つ行くことで次の情報が得られる。読み聞かせや体験談をきいて素晴らしいところを学ぼう」という決意である。こうして楠は「子どもを守る文化会議（日本子どもを守る会主催）」の読書分科会や「全国子どもの本と児童文化講座（日本子どもの本研究会主催）」、教職員の研究集会など、文庫活動推

## 山梨における文庫活動（伊東）

進のために必要と思われる研究会に精力的に参加することにした。

「どうしても参加してみたかった」という楠が小学生の長男を連れて臨んだ「第3回全国子どもの本と児童文化講座」（1971年8月 於・上田市別所温泉）は、楠が文庫の世話人として、そして地域の子どもの文化活動を支える一人として共に影響を与えうことになる一人の女性との出会いの場となった。1971（昭和46）年8月10日に上田市民会館で開催されたこの第3回子どもの本と児童文化講座は、「大人870名、子ども250名が参加した熱気にみちた全体会であった<sup>(21)</sup>」。8月11、12日は別所温泉に会場を移し、「情報化時代における子どもの読書」のテーマのもと、分科会や親子読書会が行われた。その頃わが国では、1967年に日本親子読書センターおよび、日本子どもの本研究会が、1970年には親子読書地域文庫全国連絡会など、全国的な文庫の連絡組織が発足し、集会や講座が催され、文庫関係者の交流と情報交換の場が与えられ始めた。それまで個別に活動してきた文庫が連絡組織を通じて結びつき、共に文庫のあり方を探るようになっていった。文庫運動は徐々に図書館設置運動へと広がりを見せはじめる中、山梨県立図書館員だった浅川玲子もこの大会に参加していた。浅川は、楠との出会いを次のように回想する。

参加者名簿の中に甲府市に住む楠祐子さんの名前を見つけてびっくりしました。山梨からも同じ志を持った人が来ていたと、嬉しくなりませんでした。しかし、広い会場ではお会いすることができずに、甲府に帰ってから自宅に電話をして、県立図書館のこども室に来ていただき、やっとお会いすることができました。<sup>(22)</sup>

楠は浅川とのこの出会いで、「本のことだけでなく、文庫のことも一生懸命考えている職員もいるのだと知り<sup>(23)</sup>」、心強さを感じた。以後

### 山梨における文庫活動（伊東）

二人は文庫活動を核に「甲府文庫連絡会」「子ども劇場」「甲府市の新しい図書館を考える会」など次々に発足させ、県・市の子どもの文庫、文化活動の発展を大きく強く支えていくことになる。

ところで、楠の文庫活動を始めるきっかけとなる「すべての子に、本の楽しさを伝えたい」という意識はどのように培われたものであろうか。一つには小学校時代（甲府市立新紺屋小）のおはなし上手な先生との出会いや、語り部久留島武彦の来校による心躍る体験があった。しかし、それ以上に楠の育った家庭にその根を見ることができる。それは父親の存在である。

楠の幼少年期は、軍国主義に塗りつぶされた戦争の時代であった。自宅に本を届けに来る御用聞きが出入りしたり、「お父さんは子どもの服がボロでも平気だけど、本だけは買って来るんだよ<sup>(24)</sup>」という楠の母親の言葉からわかるように、教師であった父親は子どもの本に対して関心の高い人物だった。この環境にあって楠は娯楽の少ない時代に、『講談社の偉人伝』、『幼年倶楽部』、『少年倶楽部』、『少女倶楽部』などを楽しみとして、いとこの行き来の中で、『小学生全集』、『修養全集』、『講談全集』など、時代が許す最大限の本と親しんだ。小学6年生だった頃、父親が『日本少国民文庫』の定期講読を始めた。時局を反映した山中峯太郎や、佐藤紅緑の作品に引きずられている娘に対し、父親は「ファシズムが台頭する中で、言論、出版統制が本格化する直前の、最後の良心的な出版として高く評価され<sup>(25)</sup>」た日本少国民文庫全16冊を我が子に買い求めた。その第1巻、ヒューマニズムを基調とした山本有三『心に太陽を持て』こそ熱心に読んだものの、以降あまり興味を示さない子どもたちに対し、父親は読み聞かせを敢行した。現代でこそ、父親の読み聞かせの推進が叫ばれる世の中である。当時読み聞かせを行った父親に、子どもと良書との結びつきを願う愛情を

## 山梨における文庫活動（伊東）

はかり知ることができる。子どもだった楠はいつのまにか父の読み聞かせる作品の暖かさに包まれ、その世界に浸っていった。彼女はそれ以降、日本少国民文庫を熱心に愛読するようになった。その最終巻、吉野源三郎『君たちはどう生きるか』は「そうだ、これなんだ、こういうことを教えて欲しかったんだ」と、女学生になった楠の魂を揺すぶる一冊となった。

こうして本の楽しさに開眼した楠は、終戦後に本好きの友人にも恵まれ、山梨師範学校の図書室へ足繁く通うことになった。また、アルバイトとして県立図書館の書庫の整理を行い、本に囲まれ本の魅力を心ゆくまで味わう日々を送っていた。後に、文庫活動を開始して最初に思ったのは「お父さんの子なんだ私は。子どもは自分の子だけとは思えない。これは教師の血だ」、そう楠は話す。

### 2. 2 文庫の独自性

「第3回全国子どもの本と児童文化講座」に参加した後、楠の意欲的な文庫活動が続いた。開設1年にしてすぐに本が足りない状況になった。子どもや大人の口コミから利用者は増え続け、小さな青沼文庫には40～50人の利用者が訪れ、協力者から寄付された200冊程度の本では子どもたちの要求に応えられなくなっていた。県立図書館職員浅川玲子との出会いから、図書館の団体貸し出しの制度を知り、県立、市立両図書館それぞれから1ヶ月に40冊の貸し出しを受けた。この40冊の本を自転車に積み、毎月両図書館へ取り換えに行く作業を楠は、「年の暮れの雑踏の中を、全神経を集中して自転車を走らせる時には、何でこんな仕事を始めてしまったのかと思ったりもした」と懐かしく振り返る。

図書の貸し出しの他に、読み聞かせ、親子読書、おもちゃ作り、紙芝居、文集作り、さらにハイキングなど楽しい催しも行った。催しのやり方については、「子どもの本」と名の付く研修会に片っ端から参加してアイディ

### 山梨における文庫活動（伊東）

アやヒントを学んだ。企画はメンバーが月1回の会議を開いて練り上げた。

翌1972（昭和47）年には、それまでの活動内容を甲府市で開催された第21次日教組全国教育研究集会で発表することになった。この会に向けて、母親の代表の楠と、教師代表の横森サチ子、図書館職員浅川玲子の三者の交わりをもとに「山梨子どもの本研究会」を発足させた（1972年）。

しかし、この研究会で研修を重ねていく中で、楠には一つの疑問が生じた。会員のほとんどは小学校の教師のため、学級活動と読書に関する話題も多かった。「子どもの本の話題に関しては共通なのだが、遊び場的な、地域に密着した文庫の運営方法を学びたい。」楠は4年間の文庫活動を経て、自らの文庫観を確立しつつあった。「紙芝居、折り紙、これがあるからいいんだよなぁ。」という子どもたちの声に楠は耳を深く傾けていた。また、「文庫の子どもたちや親と歩いて、遊んで、食事作りをして、風を感じて本を読む」武田神社や善光寺へのハイキングで見せた子どもたちの表情から、「子どもの成長に遊びは不可欠。その遊びの一つに読書は位置づく。文庫は本を仲立ちとした楽しみの場所」と考えるようになっていた。

それに加えて、「山梨子どもの本研究会」は働く女性（教師、保育士）が多く参加するので夜間に開催されることが多く、家庭の主婦である楠はしだいに方向を分けていかざるを得なかった。

しかし、楠はここで研修を終えようとはしなかった。浅川と共に1975（昭和50）年に主婦でも参加可能な「山梨子どもの本をひろめる会」を発足した。山梨県立図書館や県立ボランティアセンターを会場に、本の感想を語り合ったり、紙芝居の枠作りや手作り絵本の作り方、折り染めなどを学んだ。ここで学び得た知識や技術は、文庫の子どもたちに「読書はあそびの一つ。だから楽しいことが一番」という光になって降り注いだ。それ以前にも青沼文庫利用に関する親の意見として、「子どもが楽しみにしている」ことや「文庫を通して自分と同じ本を友達も読んでいるという喜

### 山梨における文庫活動（伊東）

「<sup>(26)</sup>」を子どもが持っている」と記されているが、青沼文庫は単に読書の場にとどまらず、子ども同士や大人の結びを育み、本を仲立ちとした楽しみ の場所としてそれ以後一層位置付けられていった。

楠の主体的な文庫活動が発展していく陰には、一坪図書館運動をきっかけに結ばれた甲府市立図書館と、楠をはじめ自発的に文庫を始めた甲府の文庫人との連携がある。

「その運動に賛同しながらも、あくまで市民の自発的な意志を尊重<sup>(27)</sup>」した甲府市立図書館は、一坪図書館運動にとらわれず、住民の意志を最優先した文庫活動を保障していった。まず市立図書館が市内の文庫に300冊の配本を行うようになった。楠はその時の喜びを語る。

これでもう、毎月重い本を持って、図書館へ通わなくてもすむと思うと、ほんとうに嬉しかったものです。<sup>(28)</sup>

甲府市立図書館と甲府市の文庫は1975（昭和50）年11月に「甲府市読書推進連絡協議会」を発足させた。当初、文庫の代表者、小中学校の教師、読書グループの代表の参加による研修や情報交換が主な活動だったが、文庫の代表者たちは補助金や配本に関する陳情、請願提出なども行った。その結果、連絡協議会への補助金の交付が可能になった。また、配本数も増加し、看板・書棚の貸与が受けられるようになった。さらに、図書館行政の改善の一翼を促した。つまり、連絡協議会を軸として文庫活動が活発に行われたことが行政の意識を改革して図書館の必要性を認識させた。連絡協議会に所属し、文庫と文庫の間、文庫と図書館の間に互いに補い合う関係が成立し、楠の文庫活動は一層の広がりを見せた。1983（昭和58）年「甲府文庫連絡会」と改称し、その後も積極的な活動を続けた。かつて「頼るものは『子どものしあわせ』1冊の本だけだった」楠の文庫活動は

## 山梨における文庫活動（伊東）

こうして力強い連携を得ることになった。

「甲府文庫連絡会」発足による各文庫間、また文庫と図書館間の連携の中で子どもと共に文庫活動をすすめていった楠は、図書館の役割・重要性を切実に感じていくことになる。県内外の先進図書館見学と、『市民の図書館』<sup>(29)</sup>からの学びを重ねた楠は、「親しみやすい素敵な建物、そして熱心な職員、選書のよさ、見るほどに聞くほどに甲府にもこんな図書館を」と願い、利用者と職員が心を開いて交流しあうことで、図書館は成長していくものである、「利用者としての自分たちの責任の重さを考えさせられた」<sup>(30)</sup>と述べる。図書館の役割の大きさを痛感すると同時に、文庫の独自性についても意識するようになっていった。「文庫は単なる公共図書館設立のためのステップではありません。文庫が発展したものが図書館でもありません。子どもたちのためによりよく文庫活動を進めるために図書館に援助してもらう、こういうことでしょう。」37年間の文庫活動を振り返りながら楠はこう話したが、文庫の独自性について楠に確信を与えた1冊がある。それは横浜で文庫活動を行う児童文学作家長崎源之助の『本のある遊び場』である。そこには、遊びの中でこそ子どもに本を出会わせてやる、読書を楽しむということも子どもにとっては遊びそのものでありたい、という長崎の考えが記されていた。それは、かつて楠がおぼろげながら気づいていた「文庫は本を仲立ちにした楽しい場所」という文庫観を確固たるものにした。読書を特別なものとして扱うのではなく、子どもの文化の一つとして捉えたい。限られた人数を対象にした親密感のもとに営まれる「本のある遊び場」という観点は、図書館に代わることのできない独自の文庫観であった。

もちろん文庫活動の中でも特に重要な仕事である選書も、文庫の独自性を生かし、遊び場であり限られた人数を対象にしていることが可能にした方法がとられた。文庫連絡会での情報交換や子どもの本の研究団体が作成

## 山梨における文庫活動（伊東）

する本のリストを多数学び、それをもとに選書するが、楠にとっては「紹介される素晴らしい本を選ぶことは大前提であるが、何よりこの地域の子どもにとって今楽しめる本は何か」が重要だった。「岩波子どもの本はすばらしいが、この地域の今のこの子たちには少々むずかしいかな」と、限りある資金の中で、青沼文庫を訪れる目の前の子どもたちが楽しめる本を選定しようと心を砕いた。

「文庫というものはむしろ読書の施設としてだけ捉えるのではなく、児童文化全般の中で考えていかなければいけないのではないか」という言葉<sup>(31)</sup>に触発されるかのように、楠はそれ以降「子ども劇場」、「甲府市の新しい図書館を考える会」（1988年）などを発足させ、文庫活動を一層発展させていった。子どもたちのためにと始められた楠の文庫活動は1999年（平成11年）からはその舞台を病院の小児病棟の一室に移し、「本のある遊び場」は37年間その灯りを灯し続けている。

## まとめ

楠は自分のことを、本の専門家でも教育の専門家でもない「一介の主婦」と言う。その「一介の主婦」がどうして文庫活動を37年間も続けることができたのか。ボランティアとして子どものために37年間継続し得る源はどこにあるのか。資料研究、聞き取りをとおして気づいたことが二つある。

一つは、子どもの読み物まで軍国主義一色に塗りつぶされた時代に、幼少年期を送ったこと。友情、正義までが歪められ、真実を知る手段を持ち得ない、自由が著しく制限されていた時代を経験した楠は、かつて楠の父親が楠に手渡したように、どんな時代にあっても貫かれるべき人間愛、良心、自由があることを子どもに伝える重要性を身を持って知る人物であった。このことが楠の子どものしあわせの主体的追求を推し進めた原動力となっていたといえる。

### 山梨における文庫活動（伊東）

もう一つは、純粋に子どもが好き、本が好きであったこと。つまり誰の指示でもない、自発的な活動であったこと。読書そのものを尊び、子どもを本好きに教育しようとか、社会的評価にとらわれたりするのではない、見返りを考えない無償の子ども愛に支えられていた。それは、「文庫は本のある楽しい場所」という楠の文庫観の構築に証明される。これは、まさに公共図書館に対する文庫活動の独自性の発見ともいえる。

長い年月の中で様々な困難は当然あったのだろうが、聞き取りの最中も楠はほとんどそれらを言葉にしなかった。おそらく義務感からでなく、子どもが好き、本が好きで行われた活動であるので、困難を困難として意識しなかったのではないかと思われる。たとえ困難に出会っても、子どものしあわせを願う気持ちが創意工夫や独創性を呼び起こし、困難を容易に乗り越えさせたのだろう。

無償の愛ではあるが、楠には文庫を通して知り合った人々と時間を共有することによって、絶え間のない自己変革がもたらされた。それは楠がすべての子どもたちのために始めた青沼文庫の活動から生まれて発展していった文化活動や、甲府市の図書館づくりへの提言、そして現在の病院文庫での実践の軌跡が物語っている。

#### 【注】

- (1) 吉田右子「1960年代から1970年代の子ども文庫運動の再検討」『日本図書館情報学会誌』50 (3)、2004、p.104.
- (2) 小河内芳子『児童図書館と私（下）』日外アソシエーツ、1981、p.11.
- (3) 全国子ども文庫調査実行委員会編『子どもの豊かさを求めて3－全国子ども文庫調査報告書』日本図書館協会、1995、p.6.
- (4) 前掲書3、p.9.
- (5) 高橋樹一郎「子ども文庫の現状」『日本経済新聞』（2004年1月16日夕刊）
- (6) 植松光宏『山梨・本のある風景』1989、p.209-210.
- (7) 前掲書3、p.71.

山梨における文庫活動（伊東）

- (8) 前掲書3、p.76-79.
- (9) 「座談会 地域とつながる子ども文庫」『コミュニティ』No.123、1995.5、p.49.
- (10) 前掲書3、p.60.
- (11) 前掲書3、p.11.
- (12) 山梨県立図書館『山梨県立図書館50年のあゆみ』p.26.
- (13) 山梨県立図書館『一坪図書館だより』第37号、1986、p.4.
- (14) 山梨県立図書館企画調査課・山梨県公共図書館協会事務局『山梨県の図書館2005-山梨県図書館白書-』山梨県立図書館、2006、p.25
- (15) 甲府市読書推進連絡協議会『なでしこ-甲府市 文庫のあゆみ-』1980、p.5.
- (16) 甲府文庫連絡会『なでしこ-甲府文庫連絡会25周年記念誌-』2000、p.24-29.
- (17) 前掲書15、p.5.
- (18) 前掲書16、p.24-29、『なでしこ-甲府文庫連絡会30周年記念誌-』2006、p.30-31.
- (19) 前掲書16、2006、p.32.
- (20) 小林静江「わが家の子ども文庫」『子どものしあわせ』第139号、1967、p.22-25、「団地にできた電車図書館」『子どものしあわせ』第145号、1968、p.59-63.
- (21) 日本子どもの本研究会『子どもの本棚』第1巻 第8号 1971、p.5.
- (22) 前掲書16、p.47.
- (23) 前掲書16、p.56.
- (24) 楠祐子『親子文集 つくしんぼ』1973、p.25.
- (25) 鳥越信
- (26) 前掲書24、p.25.
- (27) 前掲書16、p.33.
- (28) 前掲書15、p.5.
- (29) 日本図書館協会『市民の図書館』1984
- (30) 前掲書16、p.56.
- (31) 長崎源之助「読書を孤立させないために」『現代の図書館』1979、p.128.